E.SHIBUSAWA

［逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え］

text：渋澤 健

逆境の時こそ、力を尽くす

第8回 「論語と算盤」に見出すリスキリングの重要性

世界ではもちろんのこと、日本国内でも格差から生じる貧困など社会的課題は深刻です。その課題解決を政府の役割として目をそらすことなく、我々企業人にも責務があると渋沢栄一は唱えていました。

「人道よりするも経済よりするも、弱者を救うは必然のことである」

（【論語と算盤】防貧の第一要義）

また、社会における弱者に手を差し伸べるべきという信念の持ち主であった渋沢栄一が考えた「防貧の方法」とは、政府によるバラマキの分配政策ではありませんでした。

「ただしそれも人に徒食悠遊させよというのではない。なるべく直接保護を避けて、防貧の方法を講じたい」

（【論語と算盤】防貧の第一要義）

つまり、ただ保護するだけではなく、自立を促すことが重要であると栄一は考えていたようです。そういう意味で、企業人が提供すべき課題解決とは社会で雇用をつくるということでありましょう。

およそ80年前の戦争の焼け野原から復興した日本社会において、企業は国民に安定した生計を提供する社会福祉的な機能を求められ、それに応じました。当時の人口ボーナスの追い風による経済成長で、日本企業が掲げた「年功序列・終身雇用」は世界から注目を浴びるようになり、あの時代の成功体験をもたらした労働慣習であったことは間違いないでしょう。

ただ、時代は変わりました。経済成長の追い風となった人口ボーナスは失せて、世界における日本企業の競争力は相対的に停滞しました。工場ラインのような規格プロセスを重視するだけではなく、結果にコミットする創造性が求められる時代の流れになりました。

このような時代の変化の中では労働市場における新陳代謝を高めなければ、人体と同じように、様々な病が生じます。そのような状態で構造的な賃金アップを期待できるわけがありません。

そういう意味で、最近の「新しい資本主義実現会議」での検討に歓迎する動きがあります。リスキリングという文脈で語られている「労働移動円滑化」です。昭和時代の成功体験である年功序列・終身雇用のあり方を、令和時代に合わせた労働慣習および法制に進化させることは、新しい資本主義が実現すべき重要論点であります。

「適材の適所に処して、しかしてなんらかの成績を挙げるとは、これその人の国家社会に貢献する本来の道」

（【論語と算盤】人は平等なるべし）

と栄一は指摘します。

この平等とは「結果平等」という意味ではなく、「機会平等」でありました。同じ組織、同じ仕事に終身的にとらわれることなく、リスキリングなどにより労働移動という機会が円滑で平等にある社会は、元気ある社会でありましょう。